

## 中華人民共和国 北京日本人学校に勤務して

前 在中華人民共和国日本国大使館附属 北京日本人学校

現 上川郡当麻町立当麻小学校 教諭 澤渡 千修

(派遣期間 2008～2010年度)

### I 中華人民共和国について

#### 1 国旗など



国旗



中国共産党旗

ソビエト連邦の国旗と似ているが、「赤い星」がなく、鎌と槌の図柄のうち鎌の持ち手がより短い。中華人民共和国憲法において「中華人民共和国を領導（上下関係を前提とする指導）する政党」と明記され、建国以来一党独裁制を維持している。

通称「五星紅旗」とも呼ばれ、赤い地色は共産主義革命を象徴する。大星は中国共産党と人民の団結を、4つの小星はそれぞれ労働者・農民・知識階級・愛国的資本家を表わし、黄色は光明を象徴する。また同時に、大星は中国本土を、4つの小星はそれぞれ満州・モンゴル・ウイグル・チベットを表わすとも言われる。経済学者でもある曾聯松のデザインによるもので、1949年9月に制定された。

中華人民共和国は、23省、5自治区、4直轄市及び2特別行政区から成り立っている。

#### 2 人口

全国 12億7千万人（日本 1億27百万人の10倍）

北京市 1380万人（東京都 1310万人）

#### 3 面積

全国 960万km<sup>2</sup>（日本 37万km<sup>2</sup>の26倍）

北京市 1万6千km<sup>2</sup>（四国 1万8千km<sup>2</sup>）

#### 4 民族

人口の94%を占める漢族のほか、チワン族、ウイグル族、モンゴル族、チベット族、回族、ミャオ族、イ（彝）族、トゥチャ族、満族など、政府が認定している55の少数民族よりなる多民族国家である。

#### 5 気候

北京の気候は、温湿帯半湿潤大陸性季節風気候に属しています。北京の夏は、東アジアの季節風のため暑く多湿の天気となり、冬はシベリアの高気圧の影響を受け、強く冷たい風が吹き乾いた冬になります。1月の平均温度は、-7℃から-4℃となり、夏の7月の平均温度は25℃から26℃となります。

#### 6 言語

十数億の人口を擁している巨大な中国には、多民族国家であるため、漢民族の言語である漢語以外に、多くの言語が話されています。漢語は大きく華北・西北・西南地域で通用する北方語、上海・蘇州など江蘇・浙江で通用する呉語、広東・広西などで通用する粵語、福建・台湾などで通用する閩南語（福建語）、江西・湖北などで通用する贛語、湖南などで通用する湘語、梅県など客家居住地で通用する客家語の七大方言に分けられます。

## II 中国いろいろ

### 1 世界遺産がいっぱい

2011年で41カ所の世界遺産があります。ほとんどが1987年に制定されたものが多いです。その中で北京は6カ所と多い方です。

## 故宮



元がつくったものを明の成祖永楽帝が1406年から改築し、1421年に南京から北京へ都を遷してから、清朝滅亡まで宮殿として使われました。

1908年12月に、西太后が光緒帝の後継者として愛新覚羅溥儀を指名したことにより、溥儀はわずか2歳10か月で皇帝に即位させられ、清朝の第12代宣統帝かつ紫禁城に居を構える最後の皇帝となりました。

1911年10月に辛亥革命が起き、袁世凱の求めを受けて1912年2月に溥儀は退位したが、中華民国臨時政府の「優待条件」として溥儀とその一族は、紫禁城の内廷での居住を許された。1949年に、中国共産党の指導者の毛沢東は城門の一つである天安門で中華人民共和国の建国を宣言した。

## 天壇公園



祈年殿では皇帝が正月の上辛五穀豊穡を祈りを捧げた。祈年殿は直径32m、高さ38m、25本の柱に支えられる祭壇で現存する中国最大の祭壇。

## 頤和園



元朝が大都に都を置いた後、水運整備の必要性から、上流の水源地を開発を行い、昌平白浮村神山泉水から疏水し、宮廷で使用する水源を確保すると共に水運のための貯水池とした。

## 万里の長城



一般に長城を作ったのは秦の始皇帝だと認識されていますが、現存している「万里の長城」の大部分は、明代に作られたものです。北の異民族に備えるために長城を建設していました。また、北に備えるだけでなく戦国七雄の国境間にも長城が作られていました。

## 周口店・北京原人遺跡



周口店北京原人遺跡は、約25万年前から40万年前に住んだと思われる北京原人の遺跡です。ユハン・アンデションが、1923年に原人のものと思われる歯を発見した。龍骨山で1929年、中国人学者の裴文中が完全な頭骨を発見した（1941年に頭蓋骨は紛失してしまい、現在も行方不明である）。

## 2 社会見学は、日中の関係を知るのにとっても有益

6年生の歴史の学習にとって北京という土地柄はととても有益でした。特に日中戦争に関する資料は、市内の博物館に多く展示されています。それらをできるだけ多く見学させることで、日本と中国との関係をよりいっそう理解することができました。

### ①盧溝橋事件

1937年7月7日、北京市の西南方向にある盧溝橋で起きた日本軍と中国国民革命軍との衝突事件である。真実は、定かではないが日本軍の兵隊1名がいなくなり、それが中国軍の仕業だとして、日本軍が中国軍に攻撃を開始したという事件である。これをきっかけに、戦争が全世界へと進行していき、第二次世界大戦に広がっていくというきっかけにもなったものである。

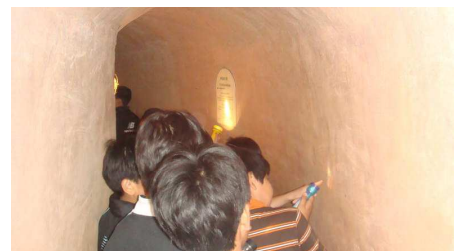
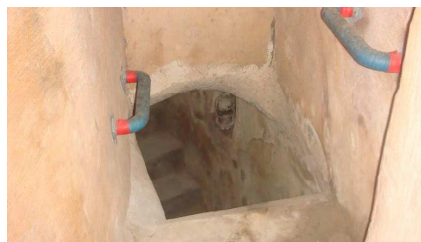
この事件が実際に繰り広げられた歴史的価値の高いこの盧溝橋を実際のもので見ることは、とてもよいものであった。この橋を当時写した写真が授業で使用している資料集に掲載されていて、それと比較しながら見る子ども達は、この頃どんなことが起きていたのか、そして現在の平穏な状況とを比較しながら見る事ができた。

この橋は、修復をしながら現在まで保つことができています。全部ではなく一部はその当時そのもので残されている。特に戦車が走った後の石のへこみ具合は、何度も戦車がここを通過して戦いに向かっていったことを示していた。今では、その横の橋の欄干にある数多くの中国獅子の表情を見ながら、全部違うことに驚いていた。



### ②地下壕

戦争の時に一般の人たちが避難していた場所です。日本でいうところの防空壕です。しかし、中国は規模が大きくありの巣のように何キロという長い地下通路を作っていました。そこは、迷路のようになっているけれど、そこにいる人たちは迷わなかったそうです。入り口は、井戸から通じていたり、小屋の片隅にあたり、敵（日本軍）に見つからないような工夫もされていました。中に入ると、大きいから小さいのまで様々な会議室もありました。敵の攻撃に備えて、銃口を出すだけの小さな穴もありました。戦争が一般人を巻き込んだのでとても大変なものであった問いことが伝わってきます。こういった戦争の歴史的遺産を見ることで今後戦争を絶対してはいけないという意識を確認できました。

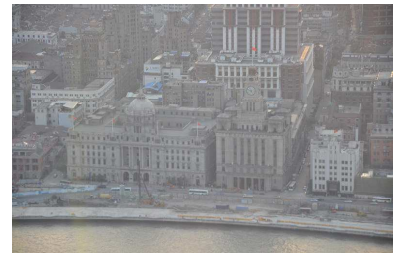
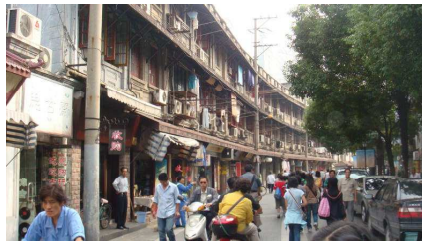




### ③上海も日本との関係が深い

中国全国各地に戦争の傷跡というのが残っていて、南京にはもっと日本の残虐な実態が知らされていると聞きます。それを教材として取り扱うのはとても難しい、修学旅行でと考えるもありましたが、他の場面で戦争を考えました。

そこで上海の疎開地です。中国は植民地の歴史というくらいあらゆる国が中国に侵入してきました。日本も上海に日本軍の基地を置いていました。国際交流ディレクターが以前上海日本人学校にいたことから、上海に詳しく事前学習で日本軍が駐在していたこと、日本人が疎開していたことを教えてもらい、上海での修学旅行での学習をより深いものにすることができました。



現在では、中国の銀行となっている建物も当時は日本に海軍の総司令部を置いていたり、イギリスの生活圏であったり、様々な外国の人たちが中国で生活を送っていました。

### 3 貧富の差はすごい



中国の人たちの貧富の差は、大きいのではないかとよく聞きます。そのことは、町の中を歩いているだけでも感じます。高級外国車が道路を走っている横で、果物（ミカンやスイカ…）をのせた大きな台車を、古い服を着た夫婦がロバに引かせています。また、赤信号で止まっていると、物乞いをする子どもや老人が車の窓をたたいてきたりします。そんな光景を目の当たりにすると、貧富の差は大きいと実感させられます。

また、住居自体も全然違います。北京は現在土地成金が増えていて、日本のバブル時代を思わせる以上の賑わいです。片方では、高級高層マンションに住んでいて、すぐその横には、胡同といわれる昔ながらの石造りの長屋のようなものがまだ存在します。北京市の中心地である、故宮周辺もだんだんと都市化が進み、昔からすんでいる人たちが立ち退きを命ぜられています。話によると、これらの都市開発をする人たちは、外地人（ワイディレン）といわれる、北京以外からやってきている人たちのようです。



道ばたには、こういったゴミを集める人もいます。これが職業ということもあるのか、道行く人の中には、ゴミをゴミ箱ではなく、そこら辺に捨てて「この人達の仕事がなくなるから。」という声も聞かれます。



#### 4 漢字の国中国



つくづく漢字というのは、中国の文化だと感心させられます。英語が最近教育にも入ってきていて、英語を使うところも増えていますが、基本的には漢字です。

#### 5 急激に近代化進む中国

2008年の北京オリンピック、2010年の上海万博をきっかけとして、中国は、近代化をどんどん進めていっています。北京、上海ともに、住宅ラッシュであったり、世界の各企業がどんどん中国に参入してきていたりしています。



オリンピックに向けては、メイン会場となる国家体育场（通称：鳥の巣）を始めとして、様々な建物が整備されました。中国の人は、メンツを重んじるということをよく聞きますが、このオリンピックは、国家の威信にかけても成功させなければならないという思いがありました。8月8日8時開催をめぐって工事が行われていました。しかし、おおよその建物等はそろったのですが、すべてというわけにはいかず、塀にオリンピックのキャラクターの絵を張っているところもありました。

会場では、セキュリティはとても厳しく、チケットの中にチップを埋め込み入場の検査を行っていました。科学技術という面では、世界に通用するものがあるのではないかと思います。しかし、運営側の進行においては経験が浅いので、不備が数多くありました。入場する際に、持ち物検査を受けなくて入っていく人がいたり、自分の番号ではないところに座っていて、そのチケットをもった人が来たら譲ったり、Bのチケットをもっているのに、Sの席に行けたりします。空いている所を無駄にしないという考えからだと思いますが、国民性を感じました。



上海で行われた万博は、日本ではどのように映っていたのでしょうか。中国の人たちは、とても楽しみにしているように思いました。駐車場には、成都などとても遠方からの長距離バスが停車していました。全国各地から訪れていました。チケットの販売など、とても不明瞭なことがあったり、各パビリオンの入場制限により来た人たちにとても不愉快な思いをさせたりもしていました。やはり、こういったイベントの主催というのは、オリンピックでは身につけることができなかつたように感じました。



### Ⅲ 中国の教育について

#### 1 花家地実験小学校

中国の学校では、各地区に中心校というのがあり、その学校に入らない限り上の学校へは進めない状況があります。また、その学校では月に1回学力テストが行われランクを決定しているそうです。(その昔の日本の学力社会、偏差値教育を見ているような感じを受けます。) 其中で、実験小学というのは日本でいうところの附属小学校のような存在であり、各先生が教育に関して研究を深めるとい学校です。



写真にあるジョギング風景は、体育の時間です。話によると、体育というのは、走ることと整列の仕方が中心で、球技などはほとんどしないということでした。

3時間目が始まる前に瞑想した後簡単な体操をしていました。集中力を増すために、行っているそうです。

#### 2 希望小学校

農村地区の経済的にも、教育環境的にも恵まれない場所に日本人会が中心となって出資し、建てられたのがこの希望小学校です。この学校には、毎年のように夏休みに日本人のボランティアとともに出向きます。その時には、在中の日本人から寄付された物(北京日本人学校でも子どもを通して、持ってきてもらいます)や、日本人会が買った教材を持っています。

所在地は、北京の中心から車で約2、3時間離れているところに何校もあります。建物は、十年以上も前に立てられた物なので、元々よい物ではないのに加えて、古くなっているのを見た目とてもきれいではありません。床も、土です。机やいすにいたっては、木肌が出ていてとげが刺さってしまいそうな物です。この様に古くなってきていることや地方でも学校が整備されてきて希望小の果たす役割がなくなっているとも聞きます。



毎年とはいいましたが、2008年は、オリンピックの関係で、「勝手に人が集まって集会等を行ってはいけない。」という政府の指令が出て、1年目は行くことができませんでした。

## IV 北京日本人学校について

### 1 学校の概要

在中華人民共和国日本国大使館附属北京日本人学校は、昭和51年4月26日設立で、初めは17名からの始まりでした。設立当初は市内の三里屯にある日本大使館公邸にありました。児童の増加とともに、現在の朝陽区将台西路に移転したのが昭和63年。その後中国の経済成長とともに、中国に駐在する日本人も増えそれに伴って、児童生徒数も増加し教室の増設を行って来ました。2008年の688名が一番ピークに、少しずつ減ってきています。

#### ①教職員の構成

北は、北海道の和寒町、南は、九州の熊本天草市から来ている文科省派遣29名、財団派遣5名、現地採用4名、中国語講師6名、英語講師4名、現地スタッフ6名、警備員6名、合わせて40名です。赴任した頃は、40代の先生が多かったのですが、ここ何年かで30代の先生方が増えとても若返ってきました。

#### ②学校経営について

「国内と異なる教育環境におかれる児童生徒に対し、教育の機会均等の精神に則り、日本国民としてふさわしい教育を行う。」という基本理念の元、学校運営を行っている。

よくわかる授業をすることにより、児童生徒や保護者からの信頼を獲得すべく日々研鑽に励んでいます。また、一人ひとりに生きる力をつけるべく、様々な活動を行っています。

- 北京日本人学校理事会の指導の下より充実した教育活動を行う。
- 教育相談の充実
- スクールカウンセラーの設置
- 父母会及び北京邦人社会との連携を図る

これらのことを通して、日本で行われる教育と同等のものを展開しています。

#### ③安全管理の徹底

2004年に北朝鮮の脱北者が、北京日本人学校へ侵入してきた事件がありました。幸い子ども達にケガ人は出さずに済みました。しかし、その頃から安全に関する体制作が見直されました。そして、年に2回の不審者（脱北者）侵入への避難訓練を行っています。また、職員は全員トランシーバーとハングルカードを持ち歩き、いつでも侵入者に備えていました。また、登校時は、輪番で子ども達を出迎え、下校時は、職員全員で見送りをしていました。



首都ということもあり、また、経済的にもとても発展してきているということもあり、駐在する日本人は多い方だと思います。北京には、日本人が2万人弱いるそうです。北京日本人学校は、たてわり班活動を一つの目玉として小学生と中学生が一緒に活動をすることを大事にしています。

## 2 小中併置という利点

### ①各行事がたてわり班活動で行われます

利点として子ども主体の活動が高い水準で行えます。中学3年生が中心となって活動を行うので、面倒の見方がとてもよく小学1年生もしっかりと活動にはいっていただけます。しかし、小学部の教師にとっては、6年生をリーダーとして育てたいという思いがあるのですが、中学3年生がいるので活躍する場面が少なくなってしまうという残念なところもあります。

#### a 運動会の応援合戦は、とても迫力があります。



応援合戦は、三色に分かれた組がそれぞれの出し物を考え、発表します。日本では、それほど時間をとらなくなってきている応援合戦ではありますが、中学3年生にとっては、とても成長の場としてとても有効的です。時数の面でいうととても多くとって、学習が大丈夫かと思いますが、計画内でやりくりしていました。

#### b 全校遠足もみんな力を合わせて

特に大変だったのは、香山公園の遠足で、ちょっとした山登りのような遠足になりました。それでも、先輩が荷物を持ってあげたり、励ましてあげたりととてもほほえましい活動となりました。その他にも、万里の長城や頤和園といった世界遺産にも遠足で行きます。

教師達は、提案する部員達は、3回の下見を重ねて遠足に臨みます。一番は、子ども達の安全です。危険箇所を調べることや教育的効果はあるのかなど行く前いった後で多くの会議を開きました。

その他にも、昼休みの掃除などで接点を多くして、人づきあいを深くしていました。日本と同じように、アドバイスに困った先輩達が教師に相談してくることもあります。それに関しては、日本で行っている指導と同じように、親身になって話にのってあげたりもしていました。

### ②中学部の先生が、小学部で授業

今となっては当たり前ようになってきていますが、中学校の先生が小学校に来て授業をしてもらいますが、併置校では、それが容易にできます。「中1ギャップ」にも対応できるとして、時間的に空いている先生に来てもらうことも多かったです。

別の話ではありますが、小学校でしか教えたことがない教師が中学校で教える。その逆の場面もあります。私はそんなことはありませんでしたが、そういった状況に置かれた先生は、大変そうでした。



### 3 日本人の方々のご協力

①在外でがんばっている子ども達を激励するために様々な著名な方々の来校

#### オリンピック選手や宇宙飛行士との交流

北京オリンピック並びに北京パラリンピックを開催されたときには、選手が来てくれました。努力をした一流の人たちの話には、説得力があり子ども達の夢をもつことにもつながったことでしょう。



ソフトボールチームとの交流は、技術を見ることもありましたが、チームの雰囲気よさがとてもよいものでした。子ども達には、とてもよい体験でした。学校教育・学級経営で育てたい力が伝わってきました。

その他にも、各競技ごとに各クラスで応援の色紙をJOCを通して送りました。それに対して、各種目の代表の方からお礼の手紙と写真が送られてきました。また、学校でも、掲示板を利用してオリンピックコーナーを作ったり、夏休みを利用して「オリンピック作品コンクール」を開催したりしました。これにより、子ども達もより一段とオリンピックへの関心、スポーツへの関心を深められ、よい機会となりました。

パラリンピックの際は、女子車いすバスケットボールチームが来校してくれました。障害者の方とあまり接することがない在外で、車いすに乗っていてもこれだけ激しく動けるのだということ実感しました。

宇宙飛行士の若田光一さんも訪れていただきました。何年か前にも訪れていて、2回目の来校でした。宇宙服を身にまとった若田さんは、日本を代表するというより世界を代表するようなオーラを発していました。自信に満ちあふれていて、40歳を越えてもまだ挑戦し続ける姿勢は、在外に住む子ども達にとってこれから世界に羽ばたいていく子ども達にとって、よい目標となったことでしょう。

#### ②日本企業のご協力

ここ最近中国に進出する日本企業は、多くありますが同じ日本人ということで、工場などを見学させていただき方（企業）もいらっしゃいます。在外にいても日本人とのつながり・絆を、こういった形で感じることができました。とても暖かく、ホッとするところです。その中で、学校理事でトヨタ自動車の方がいらっしゃり、5年生を担当したとき「子ども達に天津の自動車工場を見学させたい」と相談したところ。快く受け入れていただけました。

しかし、隣の町天津とはいえ高速道路を使っても2時間近くかかります。1日をかけて行って帰校できるか心配でしたが、様々なスタッフの尽力により成功裏に終わることができました。行く前から、危機管理に関する打ち合わせ等を綿密に行いました。



#### 4 国際交流は、身近な存在

##### ①国際ドッジボール大会（小学部1，2年生）

毎年1月の中頃4～5校が集まってドッジボール大会が開かれます。北京という土地柄もあるのかどうなのか、様々な国の学校があります。その中で、カナダ・フランス・ドイツ・ロシア・中国といった国が集まってきます。その年によって、参加したりしなかったりですが、国際性豊かに行われるドッジボール大会は、とてもほのぼのします。



##### ②現地校との交流は、異文化を知る意味でとても有益

現地校との交流は、在外という特別な環境を生かした活動は、子ども達にとってよい経験となります。それをよりよいものにするために、言語というのはとても重要になってきます。北京日本人学校では、週1回中国語の授業を組んでいます。しかし、中国語の学習に意欲をもたせるというのはなかなか難しいです。そこで、こういった中国の子達と話す機会があればモチベーションがもてます。より多くのこういった機会をもたせてあげたいと思うのですが、日本と同じ教育を施すという面でいうと、時数が足りないのが現状です。

#### 机上（機上）小学校

総合の学習を活用して現地の小学校と交流もできました。会話をし、実際の自分の言葉で質問や雑談をさせたいと考えました。そのために、週1回の中国語の時間を2週にわたって、会話の練習を中国語の先生と行いました。中国語のレベルは様々で、中国に来たばかりの子達は、初級で、四声を学習していて少し単語を覚えてきた程度でした。しかし、自分の質問に併せての中国語の構文を覚え何度も練習していました。中国の子達と交流をしたいという意欲がとてもあり、多くの質問を投げかけていました。また、中国語に関しては、土地柄両親が日本と中国のハーフという子も数名いますので、そういった子に通訳をさせるなどして活躍の場を設けて行いました。



#### 上海雑技学校

上海にある雑技学校は、世界的にも有名な学校が何校かあります。雑技の世界大会があり、それで優勝するなど優秀な成績を収めています。中国の雑技の層は、とても厚いと感じさせられました。

練習風景も見させてもらったのですが、ウォーミングアップに15分の逆立ちをしていました。途中倒れそうになる子もいるのですが、立て直して日々積み重ねが力になることを実感しました。小さい子では、5歳からこの学校に来ていて、完全寮生活をしています。学習においても、1日何時間か行い、雑技の練習ばかりではありません。

練習の区切りがよいところで、小グループに分かれ会話をすることができました。同じ年頃（12歳頃）の子達と話ができ、とてもよい刺激となりました。

